

近世ヨーロッパと地中海

—南フランスの作業場から

深沢克己

I. 序論—ヨーロッパ史を眺望する展望台

まず序論としてお話ししたいのは、ヨーロッパ史をある特定の地点、この場合は南フランスになりますが、限定された地点から観察する意義はどこにあるかという点です。それをひと言でいえば、一定の地点から見える特有の起伏や立体感や遠近法を提示することにより、個性ゆたかな歴史像を描き出す可能性が生まれるからだ、と比喩的に表現してよろしいかと思います。これに対して、地理的な限定性のないヨーロッパ史は、いわば無色透明な「全体史」であり、均衡がとれていても平板な概説的記述になりがちだと思いますので、そこから脱却するひとつの可能性として、特定地点から見るヨーロッパ史を考えてみたいわけです。

ここでひとつの比喩を、フェルナン・ブロデルから借用してみましょう。未完の遺著『フランスの自己同一性』（1986年）の序文のなかで、ブロデルはつぎのように述べています。すなわちパリをどこから眺めるか、モンパルナス・タワーの最上階から見るときと、ノートル・ダム教会の尖塔から見るときとでは、それぞれに異なる相貌があらわれ、特定地点から眺めた景観にすぎないけれども、しかしどちらもパリ市の全貌をあたえるのだ、という意味の文章を書いています。これはわたくしたちの住む東京を考えても同じことで、スカイ・ツリーの展望

台から見るか、それとも新宿高層ビルの最上階から見るかで、東からと西からの異なる都市景観があらわれますが、しかしそのどちらも真実であり、それぞれに東京の全貌を表示しているのです。これに対して、あらゆる偏りを排除して「客観的」な視座から都市を観察しようとするれば、航空写真や衛星写真など、上空から撮影した画像を用いるべきだ、という主張も成立します。しかしそれは不偏不党の観察方法であるとしても、その都市に固有の形状や起伏や色彩はうしなわれ、個性を消滅させた平板な図面に向かいあう結果になりがちです。

その意味では、佐藤彰一氏の講演のなかで積極的に提示された「グローバル・ヒストリー」の概念に対して、わたくし自身はいくらか留保したい気持ちをもっています。グローバル・ヒストリーとは何か、その概念と方法をどう定義するかという点について、これを標榜する歴史家のあいだでさえ共通理解は存在しないようですが、いずれにせよ世界史を統一的な論理のもとに整序し解釈することが可能である、という暗黙の前提に立脚しているように思います。したがってこの包括的な「全体史」は、視野の限定された個別研究または「部分史」よりも上位にあり、個々の部分的現象を包括的文脈のうえに配置することにより、はじめて高次の普遍的説明をあたえることができる、という仮説に依拠しています。もしそうだとすれば、これは唯一可能な客観的歴史を構成するはずですが、はたして歴史認識とはそういうものか、わたくしは疑問に感じています。さきほどの比喻にもどれば、人工衛星から観察できる都市画像は、唯一客観的な全体像をあたえるというよりも、むしろそれ自体が抽象化された部分的形象を表示するにすぎません。かつて詩人のポール・ヴァレリが哲学者を批評した表現を借りるなら、グローバル・ヒストリーの歴史家は「普遍性の専門家」として存在理由をもちますが、そこに歴史認識のすべてが併合され還元されるわけではないことを、ここで確認しておきたいと思います。

それゆえ普遍性や包括性の追求に過度の重要性をあたえるよりも、む

しる歴史を観察する主体の存在被拘束性を自覚的に受け入れ、観察者が立脚する時間的・空間的位置により歴史認識の構成条件が変化することを積極的に活用して、そこから歴史記述の変動性と多層性とを考察し解明する努力のほうが、実り多い成果を期待できるのではないか、それをつうじて個別と全体、特殊性と普遍性、限定性と包括性との二項対立を克服すべきではないか、と個人的には考えております。本日ここで南フランスと地中海を展望台とする近世ヨーロッパ史を論じようとする意図は、以上のような問題関心にもとづいています。

南フランスの視点からヨーロッパ史を再考する立場は、従来の西洋史の基本的記述法、とくに近世・近代史を記述するときの基本的スタンス、またはその前提となる価値尺度や評価基準に対して、一定の批判的拠点を構築することを可能にするのではないかとわたくしは考えています。そこにはヨーロッパ的次元と、フランス的次元との二重の問題提起が含まれます。まず第一の次元では、西洋近代文明の成立を、イギリスを中心とする北西ヨーロッパの発展過程のうちに見出す（今日もなお支配的な）歴史観があります。つまり近代市民社会と資本主義経済、それらをささえる法的原理、政治制度、社会構造、および倫理的・文化的諸価値は、すべてこの地域で典型的な発達をとげるので、近世以降は北方の先進地域と南方の後進地域との格差が増大し、その結果として南ヨーロッパは近代化に失敗したという歴史解釈法です。そして同じ基準を適用することにより、やがて世界規模での先進諸国と後進諸国との区別が理論化され、その対比が固定化されていきます。

たしかに今日では、このような世界史記述法に対する批判的な言説が、むしろ優越するようになりました。しかしその前提となる価値基準が内在的に克服されたかといえ、おそらく検討されないままに黙過されてきたのではないかと。むしろ「ヨーロッパ中心史観」に対するイデオロギー的断罪や、現代アジア諸国の経済成長から出発する遡及的な歴史解釈法など、いわば外在的な批判にとどまるのではないかと。

れゆえヨーロッパ史の枠組みの内部で構築された先進性と後進性との理論的対比を検討せずに、世界史解釈のヒエラルヒー構造を克服することはできないのではないかとわたしは考えています。

それというのも、この論理構造は第二の次元、すなわちフランス史の次元に内在化されているからです。伝統的な歴史記述法は、中世後期または近世初頭あたりから北フランスの先進的發展と南フランスの後進的停滞との分岐が発生し、やがて近代市民社会と資本主義経済の確立により格差が決定的になると説明してきました。フランス近代社会は、パリを中心とする政治過程により牽引され、北フランスの社会構造・経済成長・文化発展を基盤として成立した、とする解釈法です。南北フランスの境界線は、かつてはロワール川の以北と以南とで分割されましたが、近年ではブルターニュの港町サン＝マロとジュネーヴとを結ぶ直線が用いられることが多くなりました。いずれの場合にも、この境界線の北側では自由で個人主義的な経済活動と社会関係が發展し、民主的共和政を推進する都市民衆運動を生みだしたのに対して、南側では貧しい農村社会を基盤に地主貴族やカトリック聖職者の権威が存続し、伝統的な生産様式と拘束的な社会関係が温存され、ヴァンデの反革命戦争やプロヴァンスの白色テロを生みだす基盤になった、というわけです。

たしかにこの二分法的な歴史解釈も、近年ではあまり強調されることが少なくなりましたが、しかしそれと正面から対決する試みがなされたわけではなく、そのための理論的枠組みが構築されたわけでもない。したがってやはり暗黙のうちに、この二分法的固定観念が継承され、ときどき思いがけない形で、概説的な歴史記述のなかに出現してきます。

要するに、いわゆる近代主義的歴史観は、今日では批判されるのが当然のように考えられていますが、それを批判するための具体的な素材をどのように構成し、その論理的な枠組みをどうやって創出するか、

課題は依然として残されたままのようです。その作業を遂行することが、まさしく歴史家にとっての地道な課題であり、本質的な使命ではないか、とわたしは考えています。それをわたし自身の研究体験にもとづいてお話しするのが、本日の講演の趣旨でございます。

そこで本講演の課題をひと言でいえば、南フランスを作業場として、地中海のがわから近世ヨーロッパ史を眺望することです。そのための作業仮説として、わが国で広く採用されている「世界システム」論の論理構造を無批判に前提とせず、地域の内在的論理を探究することにより、歴史像の再構築をめざす方法を採用したいと思います。

佐藤彰一氏も言及されたように、ジャネット・アブール＝ルゴドの著作をはじめとして、今日では世界システム論の思考方法を中世以前の時代にまで適用する傾向が出てきましたが、ここではこの理論に出発点をあたえたイマニュエル・ウォラステインの議論に限定して考えたいと思います。ウォラステインはもともとポール・スウィージの流れをくむマルクス主義者で、1960年代にラテン・アメリカを対象として構築された「従属理論」の枠組みを歴史に適用することにより、一躍有名になった社会学者です。それゆえ彼の提示した「中核」(コア)と「周辺」(ペリフェリ)との二分法的または二元論的な概念構成は、このような理論的背景から生み出され、開発と低開発、先進と後進との区別および相互連関を前提にしています。この点を捨象して、中核と周辺という用語だけをひとり歩きさせ、世界システム論を無制限に拡大解釈する方向に進むのは、いささか危険なやりかたではないかとわたしは考えていますので、本講演ではそれから距離をおき、この枠組みを南フランスに適用することに対して慎重でありたいと思います。

なお厳密に言えば、ウォラステインはブodelの影響下に三分法を採用し、中核と周辺との中間に「半周辺」(セミ・ペリフェリ)の概念を導入しましたが、その前提となる価値基準は同一であると考えられますので、この中間概念も含めて留保したいと思います。

以上の構造論的な側面に加えて、変動論的な側面をも考慮する必要があります。ウォラステインには変動論が欠けているといわれますが、彼の理論の前提には、ヨーロッパ文明の中心が地中海沿岸から北海と大西洋沿岸に移動し、北西ヨーロッパ諸国の経済的・文化的覇権が確立するという歴史像があります。この歴史像を自明の前提として、地中海世界を黄昏色に描写する姿勢をも、ここでは慎重に回避したいと思います。それとは異なる光のもとで、南フランスを観察することはできないものか。

以上のような関心にもとづき、本講演では南フランスの農業経済、海上商業、および社会文化現象について若干の問題提起をいたします。対象となる時代は、ほぼ中世後期から19世紀にいたる「長い近世」に相当し、プロデルのいう「長期的持続」の時間幅を設定しています。

II. ヨーロッパ農業史再考—農学史的考察

まず古典的な議論から出発しましょう。ヨーロッパ農業経済史の正統的記述には、農業生産様式の地理的偏差と農業革命論とに関する理論的前提があり、ステレオタイプ化された図式的な解釈があります。それを端的に言えば、北西ヨーロッパは開放耕地制（オープンフィールド）の農村地帯であり、これに結びついた有輪犁の使用、三圃式農法、定額借地制（フランス語のフェルマージュ）が発達し、生産性の高い進歩的農業を成立させ、大土地所有制と資本家的農業経営を創出し、やがて農業革命を実現したことになります。これに対して南ヨーロッパは無輪犁の使用に結びつく不規則耕地制の農村地帯であり、二圃式農法と分益小作制（フランス語のメテヤージュ、イタリア語のメッツァドリア）が支配的で、生産性の低い後進的農業から脱却できず、小土地所有が残存し、技術革新も停滞したので、農業近代化に挫折したといわれてきました。

マルク・ブロックの古典的名著『フランス農村史の基本性格』もまた、基本的にこの図式を踏襲しています。それを理論的に純化したのが、日本の戦後経済史学成立に指導的役割を演じた高橋幸八郎氏の『市民革命の構造』です。この書物のなかで高橋氏は分益小作制を「半封建的」寄生地主制と規定しました。現在ではあまり用いられなくなった概念ですが、高橋理論を継承する遅塚忠躬氏も強調されたように、「半封建的」とは事実上「封建的」の同義語であり、この概念を適用することにより、ロワール川以南のフランス農村社会の前近代性を強調したのです。

そんな古風な議論をむしかえす必要はない、といわれるかもしれませんが、そう簡単に切り捨てられない面があります。なぜならばイマニュエル・ウォラステインの世界システム論も、これと同じ次元の認識に立脚しているからです。ウォラステインは、労働形態の階層化を基準に国際分業の垂直的構造を説明し、「中核」地域は自由な賃労働制、「半周辺」地域は分益小作制、「周辺」地域は再版農奴制または奴隷制に対応すると述べています。各地域の地理的区分はやや曖昧な面がありますが、おおむね「中核」はオランダ・イギリス・フランス、「半周辺」は南ヨーロッパ、「周辺」はエルベ川以东の東ヨーロッパおよび新大陸植民地で、それが18世紀後半から徐々にアジア諸地域に拡大されるところを考えています。要するに高橋理論の「半封建的」土地所有が、ウォラステインの「半周辺」に相当するわけで、理論構成は異なっても、その前提となる認識根拠は同一なのです。しかし歴史家にとって必要なことは、この認識根拠の妥当性そのものを再検討する作業です。

北西ヨーロッパ農業だけを近代性の光明により輝かせ、南ヨーロッパ農業をまとめて後進性の暗闇に沈める歴史観、先進性と後進性との二項対立の理論を克服し、脱構築することは可能でしょうか。確立された「常識」と闘うのは容易なわざではありませんが、歴史家や地理学者の地道な研究作業のなかから、価値判断を転換させる素材を抽出

し、南ヨーロッパ農業の内在的構造を考察するための出発点とすることは可能です。

ここでは時間の制約から、2点の研究書を引用するにとどめます。ひとつは農業地理学者ダニエル・フォシェの論文集『地理学者からみた農村生活』（1962年）です。フォシェは南フランスのトゥルーズ大学教授で、今日まで継続している学術雑誌『農村研究』*Études rurales*の創刊者のひとりですが、この著書のなかで、南フランス農業を北西ヨーロッパ農業の価値基準で評価する手法を批判し、たとえば無輪犁と二圃制農業の「後進性」を論じる場合に、それが第一に穀物生産にのみかかわる技術であり、第二に地中海沿岸地方の土壌や気候に適合する耕作形態であることを考慮すべきである、と述べています。つまりそれらは夏季の乾燥がきびしく、また総じて土壌が浅い自然環境に適應する技術形態、いわゆる「ドライ・ファーミング」の一形態であり、したがって有輪犁・三圃制による穀物増産のモデルを根拠に、その後進性を論じるべきではないのです。むしろ南フランスの農業革新は、このようなモデルとは別個に、独自の地理的・歴史的環境にもとづく作物栽培と輪作方式と経営形態を創出することにより可能になった、とフォシェは考えています。

これとほぼ同じ方向性を示すのが、歴史家ピエール・ヴィラルの学位論文『近世スペインにおけるカタルーニャ』（1962年初版、1982年再版）です。フェルナン・ブロデルの理論的枠組みを採用して、地理的環境・農業変革・商業資本形成の3部構成をとるこの書物のなかで、ヴィラルは18世紀後半のカタルーニャ地方が、独自の複雑な輪作方式にもとづく集約経営を導入し、葡萄・オリーブ・大麻・コルク樫・桑（養蚕）などの地中海性園芸・工芸作物の栽培を発展させた事実を、多様な地域的偏差を考慮しつつ分析しています。ここで少し補足すれば、カタルーニャの農業発展は孤立した事例ではなく、同時代の南フランスでも同様の現象がみられます。18世紀末から19世紀にかけて、地

中海沿岸のプロヴァンス・ラングドック・ルシヨン諸地方では、工芸・園芸作物の集約的小経営が飛躍的發展をとげ、やがてラングドックでは葡萄栽培の大経営も増加して、この地域の経済成長を促進しました。現在でもここでは農業人口密度がきわめて高く、しかも住民1人あたりの所得や貯蓄高は、全国的にみても高水準にあります。それはイギリスやアメリカ合衆国で典型的発達をとげる資本家的大経営、穀作主体の機械化農業とは異なる農業近代化のモデルを提示していると考えてよいでしょうか。少なくとも、かつて日本の西洋経済史家が考えたような、寄生地主制のもとで貧窮にあえぐ「零細農民」というイメージが、いささか一面的なものであることは確実でしょう。

ヴィラルーはまた、カタルーニャでは輸出用葡萄酒・蒸留酒の生産が発展するとともに、毛織物工業資本の投資先がそちらに転換されるようになり、その結果として毛織物製造の衰退が加速されたことを指摘しています。じつはこれもラングドック地方でみられた現象であり、オスマン帝国むけ毛織物製造の中心地だったこの地方でも、18世紀末以降は投資活動の重心が徐々に葡萄酒生産へと移行していきます。これらは従来の経済学理論からすれば、「工業化挫折」として否定的に評価される現象です。しかし19世紀から20世紀中葉まで支配的だった工業化論のモデルを相対化して考えれば、繊維工業から葡萄栽培への資本転換が、資本主義経済の発展にとりマイナス要因だったと断定できるかどうか、再検討の余地があります。ここで参考になるのは、モデルの提示する「資本主義」概念であり、それは工業生産と必然的に結びつく概念ではなく、つねに最大利潤を求めて自由に投資先を選択する活動様式を意味します。この定義にしたがえば、工業利潤が低下し、葡萄酒生産の利潤が増大しはじめる18世紀末の変動局面では、後者への投資拡大が合理的な選択であり、それと同様の現象は21世紀の現代でもつねに生じていますから、工業化の古典的モデルだけを経済成長の排他的形態と考えるのは不適切だと思います。

これらの研究からも示唆されるように、南フランスを含む地中海沿岸地域の農業は、近代資本主義社会とはなにか、それを基盤とする近代ヨーロッパ文明とはなにかを考えるうえで、重要な問題を提起していると思います。しかし経験的事象をいくら例示しても、それにより理論の一般的妥当性を否定することはできない、というのが理論家たちの主張であり、ウォラステインもこの論法を用いて自説を擁護し、歴史家たちの「実証的」批判をかわしてきました。そこで問題になるのは、イギリス型の農業革命論が南ヨーロッパにはそのまま適用できないとすれば、それに対置すべき生産技術と経営形態のモデルを構築することは可能かどうか、という点です。そこで少し視点を変えて、農学史の考察からこの問題への手がかりを探ってみましょう。南フランスの風土に立脚し、その地理的・歴史的環境に適合する農学理論または農学思想は存在するのか。この視点から問題を考えることにより、所有と労働をめぐる生産関係分析に終始しがちな経済学の立場をこえて、自然と人間とその技術とから構成される生産諸力の領域に、考察範囲を広げることができます。

とはいえ農学史研究は、この数十年来あまり進展がありません。フランス農学史についていえば、アンドレ・ブルドの英語の著書『フランス農学者へのイギリスの影響』（1953年）、およびフランス語の浩瀚な学位論文『18世紀フランスの農学と農学者たち』（1967年）が刊行されて以後、ほとんど新しい研究は出ていません。その証拠に、ごく最近の2013年に、ブルドの英文著書が、何らの注記も修正も加えずに再版されましたが、そこには著者の基本的な歴史認識が明快に示されていますので、その要点を紹介しておきます。ブルドが論じたのは、イギリス農学のフランスへの導入、とりわけデュアメル・デュ・モンソによるジェスロウ・タルの農書の翻訳・紹介・実践・批判が18世紀フランス社会にあたえた知的衝撃です。いわゆる「タル農学」とは休閑地を廃止し、馬力中耕・畝立・条播機・根菜栽培・牧草栽培などを導

入する技術体系であり、やがてアーサ・ヤングにより完成されるイギリス農業革命の理論的骨格を構成しました。わが国ではほぼ同時期に飯沼二郎氏の著書『農学成立史の研究』（1957年）が、このイギリス近代農学の成立を論じましたが、飯沼氏と同様、ブルドの主要な貢献は、それまで主流をなした農業経済論と土地制度論の枠組みを突破して、農業技術論の研究領域を開拓したことにあります。しかしブルドの限界は、タル農学の国際的影響力に注目するあまり、伝統的なイギリス中心史観にとどまったことです。

この限界を超える視点をあたえるのが、まさしく南フランスを地理的基盤とする農学の伝統です。そしてこの伝統は、19世紀前半の農学者アドリアン・ド・ガスパランにより集大成され、南フランス農業発展の「異なる道」を提示したのです。わたくしはこの農学者について多少の研究をしたことがあるので、それにもとづいて概要をお話ししましょう。ガスパランは南フランス、ローヌ川下流域の都市オランジュ出身のプロテスタントで、七月王政期の政治家でもあり、ローヌ県知事をへてモレ内閣の内務大臣をつとめた人物ですが、そのかたわら所有地の農業経営にも従事し、多数の農書を執筆しました。内容豊かなその農学的思索から、ここでは伝統農業と農業革新とにかかわる論点だけを抽出して要約してみます。

まず南フランスの伝統農業ですが、ガスパランには分益小作制度を正面から論じた著作があります。それによれば、この農業制度は古代ローマに起源をもつ歴史的遺産であると同時に、各地域の社会経済条件に適合する経営形態であり、そのかぎりで一定の存在理由をもつ制度です。その地理的分布はフランス中南部から地中海沿岸諸国におよび、その北限はスイスとフランシュ＝コンテからブルゴーニュをへてロワール川流域にいたる地域、南限はスペインのアラゴンとカタルーニャからイタリアをへてバルカン半島におよぶ広大な領域を包含しています。この諸地域の農業革新を考えるためには、イギリスを模範と

する輸入農学の視点ではなく、それぞれの歴史的伝統と社会経済的条件に根ざした改革の道を探らなければならないのです。

それでは南フランス農業革新は、どういう方向に進むべきなのか。ガスパランは、資本主義的商品経済と結びつき、収益性の高い工芸作物の栽培を導入することにより、労働集約的・土地集約的な農民的小経営を創出することが、この地域の経済発展の原動力になると主張しています。耕種・畜産の有機的複合により穀物生産の資本家的大経営創出をめざすイギリス農法理論とはまったく異なる成長戦略ですが、さきほども述べたとおり、長期的にみればこのガスパランの展望が正しかったことはあきらかです。しかもこの理論は、土地所有制度を基礎とする彼の社会思想にも緊密に結びついていました。ガスパランはアーサー・ヤングの農業理論をきびしく批判しましたが、それはこの理論の現実的帰結である大土地所有制と資本家的大経営とが、イギリスの貧困問題と救貧税制度を必然化したからであり、このような悲惨な社会問題を回避するために、独立生産者の小土地所有制にもとづく自由平等な社会を構想していたからです。それゆえ18世紀「アングロマニア」の無邪気なイギリス礼讃を克服し、19世紀前半の産業革命期における社会問題への洞察をふまえて、先進・後進の二元論または階層化をとみなわない農業類型論と内在発展論を構築したところに、ガスパラン独自の貢献があると評価してよろしいと思います。

それではこのガスパラン農学は、歴史上孤立した存在なのでしょう。ここで参考になるのは、飯沼二郎氏の第二の著書『ドイツにおける農学成立史の研究』（1963年）です。飯沼氏はこの著書のなかで、19世紀のドイツ農学者アルブレヒト・ダニエル・テアとヨハン・ネーポムク・フーベルト・フォン・シュヴェルツとを比較研究しています。テアはイギリス農法をモデルとして北ドイツ農業を理論化した学者として有名ですが、これに対してあまり知られていないシュヴェルツは、商品作物栽培の集約的小経営を主体とするアルザス、プファルツ、

ベルギー、ラインラント諸地方を基盤とする個性的な農業理論を構想した農学者で、それは彼がライン河畔の都市コブレンツ出身だったことに起因しています。それゆえシュヴェルツ農学は、その基本構想においてガスパラン農学と共通する性格をもち、後者がスイス、南フランス、トスカナの小土地所有制と集約経営とを実在的モデルとして構築されたことに照応します。こうしてネーデルラントからラインラントとスイスをへて中部イタリアにいたる帯状地域が、イングランド・北フランス・北ドイツの沖積平野地方と対照される農業地帯としてその輪郭をあらわし、北西ヨーロッパ的な価値基準を相対化するひとつの示唆をあたえることになります。この帯状地域の歴史的位置については、本講演の最後で総括的に論じたいと思います。

III. 近世ヨーロッパ国際商業史眺望―地中海貿易の永続性

つぎに農業を主体とする生産過程から、海上貿易を中心とする流通過程へと考察対象を転換することにより、べつの角度から問題を考えたいと思います。このあたりで佐藤彰一氏の講演の内容にいくらか近づくのではないかと期待しますが、わたくしがここで問題にしたいのは、やはりある種の図式化された歴史記述法です。この記述法は、ヨーロッパ経済の重心移動と「商業革命」論とを骨格として構成され、おおそ以下のように要約されます。すなわち中世ヨーロッパ商業経済は東方貿易を主体に成立し、地中海経由の香辛料貿易に牽引されてヴェネツィアやジェノヴァに代表されるイタリア諸都市を繁栄させた。しかし中世末期の大航海事業により新航路と新大陸とが発見され、大西洋航路が発達した結果、イタリア諸都市と地中海貿易は没落への道を歩み、その結果として近世ヨーロッパ世界経済は大西洋航路の植民地貿易を主導部門として成長をとげ、まずオランダ、ついでイギリスが商業覇権を獲得する。イギリスは植民地産品の再輸出貿易を原動力と

する「商業革命」を実現し、商業資本の蓄積がやがて産業革命を準備する、というわけです。

高校世界史教科書をはじめ、ほとんどすべての西洋史概説や通史の書物が、この図式をあきるほど繰り返してきました。たしかにフェルナン・ブロデルの博士論文『フェリペ2世時代の地中海と地中海世界』（初版1949年）の日本語訳が、いささか簡潔すぎる『地中海』の書名で刊行されて、この固定観念に多少の修正が加えられたことは事実です。しかしこの書物の紹介と翻訳は、わたくしの見るかぎり、わが国の支配的な歴史記述法に表面的な影響をあたえただけで、それを深く問いなおす効果をもたらしませんでした。

この書物に加えて、邦訳の出していない晩年の遺著『イタリア・モデル』（1989年）なども参照すると、ブロデルの歴史認識の到達点をよりよく理解することができますが、それをまず現象面から整理すれば、つぎの2点に要約されます。第一にヴェネツィア商業の主導する地中海經由の香辛料貿易は16世紀後半に力強い復興をとげ、やがて1559年のカト＝カンブレジ条約締結によりイタリア半島が長期的平和を回復すると、ヴェネツィア画派を筆頭に絢爛たる第二ルネサンスが開花する。そして第二に、16世紀後半はイベリア市場への進出を基礎に、ジェノヴァ資本がヨーロッパ貨幣流通を掌握した時代でもあり、とりわけネーデルラント反乱勃発とともに、アメリカ銀の国際流通路が大西洋沿岸航路からバルセロナとジェノヴァを結ぶ西地中海航路へと転換し、ジェノヴァからアントウェルペンへの送金経路が貨幣流通の大動脈として浮上する。こうしてイタリアはふたたび国際金融の十字路になり、1620年代までつづく「ジェノヴァ人の世紀」を現出します。ブロデルは以上の理由から、フェリペ2世時代のヨーロッパ世界が、依然として地中海をその経済的・文化的中心として発展したと考えたのです。

しかしながら、このブロデルの学説が通史的記述におよぼした影響は、さしあたり地中海の没落が1世紀ほど延期されたにとどまります。

たしかにプロデル自身の見解にしたがえば、ヴェネツィア商業の凋落は、喜望峰航路発見の直後からではなく、オランダ東インド会社がインド洋をほぼ完全に掌握し、地中海の胡椒貿易を消滅させる1625年以後でした。そして1627年以降、スペイン王国の資金調達先が、ジェノヴァ金融業者からポルトガル出身の改宗ユダヤ人、いわゆる「マラノス」へと転換するとともに、ヨーロッパ金融市場の中心がジェノヴァからアムステルダムへと移動したのです。以上の見解はもちろん歴史解釈上の偉大な革新であり、近世初頭のヨーロッパ史像を大きく転換するものですが、しかしもっと長期的に見れば、地中海から北西ヨーロッパへの中心移動という図式そのものを修正する必要はなさそうに思えますから、時代区分法に部分的修正を加えれば、容易にプロデル学説を吸収できると考えられたのも無理からぬところがありました。プロデルは経験的な歴史家であり、ウォラストインのような理論的社会学者ではなく、したがって論理構成の一貫性にさほど関心をもたなかったのも、その歴史記述の根底にある理論的含意は、十分に理解されなかった面があると思います。

それではこの理論的含意とは何か。わたくしの考えでは、それは第一にいわゆる「事件史」の批判、長期的過程の優越性を認める立場であり、第二にこの優越性に根拠をあたえる持続的構造の内部的調整能力、または外部の変動に対する適応能力の重視です。なぜならば第一の視点から新航路「発見」を画期とする時代区分法が批判され、第二の視点からイタリア資本主義の長期的優越性が解明されるからです。このような視点に立てば、ある特定市場の繁栄や没落、成長や衰退などの現象的変動論の立場を超えて、商業経済の内在的構造と有機的相互関連とを考察することが可能になり、プロデルの博士論文の射程を超えて、近世全体にわたる地中海貿易の持続的構造を理解することができるのではないか、とわたくしは考えました。その研究成果の一部は著書『商人と更紗―近世フランス＝レヴァント貿易史研究』（2007

年)にまとめましたが、ここでお話しするのはその概要です。

まず持続的構造について、さきほど要約した古典的議論のなかでは、レヴァント貿易、すなわち地中海経由の東方貿易は、ほとんど胡椒・香辛料の中継貿易と同一視されています。ですからこの中継貿易が消滅すれば、地中海貿易はただちに衰退すると考えられたわけです。しかし歴史上「レヴァント」と総称される東地中海沿岸地方と、その背後に開ける世界とは、西はバルカン半島から東はペルシアと中央アジアまで、北はウクライナとグルジアから南はエジプト、イエメン、エチオピアにまでおよぶ広大な地理的空間を包摂しています。したがってインドやインドネシア産の胡椒が輸入されなくなったら、ただちにレヴァント貿易が成立しなくなると考えるのは、あまりに短絡的な解釈といわざるをえません。レヴァントとその後背地には豊富で多様な産品があるので、喜望峰航路によるインド洋貿易の発展があたえた影響はむしろ限定的であり、地中海貿易には戦略転換と内部的調整の余地が充分に残されていたと考えるほうが自然です。

これを確認するために、16世紀から19世紀にいたるレヴァント貿易の主要商品または花形商品の変遷過程をたどってみましょう。たしかにプロデルの研究した16世紀には、胡椒その他の香辛料がまだ筆頭の地位を占めました。しかし16世紀末からしだいにペルシア産生糸の重要性が増し、17世紀には支配的地位を獲得します。これはもちろんヨーロッパ絹織物工業の勃興に呼応した変化ですが、ここでいうペルシアは、サファヴィー朝の支配領域北部、現在のグルジアからカスピ海沿岸地域の養蚕地帯に相当します。そして18世紀になると、同じくヨーロッパ綿工業の興隆に対応して、レヴァント産綿花の輸入が飛躍的拡大をとげ、衰退する生糸貿易にとってかわります。綿花生産の最初期の中心地はシリアでしたが、やがてアナトリアとマケドニアが最大の生産地になります。さらに19世紀になると、工業化時代のヨーロッパでは穀物供給が恒常的課題になり、とくに世紀中葉の食糧危機の時

代に深刻化しますが、このとき黒海沿岸のウクライナ・ルーマニア産の小麦輸入貿易が急成長をとげるのです。以上の要約からも理解されるように、近世レヴァント貿易は、ヨーロッパ経済の長期的変動に柔軟に適應して市場構造を変化させ、その生命力を維持したのです。

ここでとりわけ注目しておきたいのは、レヴァント貿易拠点の中心移動です。中世後期から16世紀まで、貿易の最大拠点はアレクサンドリアとカイロにあり、エジプトから紅海経由でインド洋にいたる商業路に立脚していました。それが16世紀後半から17世紀にかけて、ペルシア隊商路の終着点に位置するシリアのアレッポが中心市場として成長し、さらに同世紀後半には、アナトリア半島のイズミルが、やはりペルシア生糸市場として急速に勃興します。ついで18世紀には、このイズミルと並んで、マケドニアの中心都市テッサロニキが、周辺地域で産出する綿花の集散地として飛躍的發展をとげるのです。なおこのテッサロニキは、綿花輸出港であると同時に、ベオグラードをへてウィーンに到達する陸上輸送路の発着点として重要な役割を果たしました。最後に19世紀には、黒海沿岸産の穀物輸出港としてオデッサ、ついでアゾフ海のタガンログが脚光をあびるようになります。以上をまとめると、レヴァント貿易の中心拠点は、近世から近代にかけて、しだいに南方から北方へと移動したことが確認されます。それはもちろん花形商品の変化に対応しているわけですが、それが意味するのは、レヴァント貿易がもはやインド洋市場に依存しなくなったという事実です。南アジア産品の中継貿易に依存するなら、貿易の中心は南方に位置しなければなりません、それが段階的に北方へ移動した事実は、レヴァント貿易がインド洋市場への依存からほぼ完全に脱却したことを証言するのです。

このような貿易構造の内部的調整が可能になった背景には、オスマン帝国の領土拡張による地政学的条件の変化があります。ご存知のとおりオスマン帝国は15世紀から16世紀前半にかけて飛躍的に領土を拡

張し、黒海沿岸からエジプトまで、そしてバルカン半島からメソポタミアまで、広義のレヴァント全域をその手中におさめました。教科書的な歴史記述によれば、これによりイタリア商人の地中海貿易が困難になった結果、新航路開拓が促進されたと説明されますが、事実はむしろその反対で、レヴァント全域の政治的統一は、プロデルの概念を借用すれば、ひとまとまりの「世界経済」*économie-monde*を成立させ、帝国内の商品・貨幣・人材の流通空間を拡大することにより、商業活動の柔軟性と適応性を保障する効果をもたらしました。そしてイタリア諸都市、ついでフランス・イギリス・オランダ各国はあいついでオスマン帝国と「居留特許条約」*Capitulations*を締結したので、ヨーロッパ商人は一定の特権を保持しながら交易をつづけることができました。以上が持続的構造の内部的調整能力に関する概略的考察です。

つぎに商業経済の有機的相互連関についてお話しします。さきほどから問題にしているヨーロッパ経済の重心移動をめぐる図式的解釈は、個々の貿易部門を「伝統的」部門と「革新的」部門とに分類し、それらを対比することにより成立しています。つまり地中海貿易とバルト海貿易は中世的な保守的部門であり、これに対して大西洋・インド洋貿易は近代的な革新的部門であるので、前者を基盤とするイタリア諸都市やハンザ諸都市に代わって、後者の拠点となる北海・大西洋沿岸諸港が勃興するとき、近代的経済発展が開始するのだというわけです。しかしこの二分法的または二元論的な思考法は、歴史的現実には合致しないといわざるをえません。なぜならば国際貿易の諸部門は密接な相互依存関係にあり、新部門の成長は旧部門のそれと連動しているので、両者を人為的に分離して対比する思考法は、国際商業の包括的メカニズムを見失う結果になるからです。

ここでは代表的な事例を引用するにとどめます。それは西インド貿易とバルト海・地中海貿易との共生関係です。18世紀フランスでは西インド貿易が飛躍的成長をとげ、植民地産品の再輸出貿易の分野でイ

ギリスを凌駕する勢いを示しましたが、なかでもボルドーは植民地貿易港として空前の繁栄を謳歌しました。ところでボルドー植民地貿易の成長は、西インド産品のバルト海市場向け再輸出によってのみ可能でした。砂糖やコーヒーの国内需要は限られていたので、それらをハンブルクやダンツィヒ（グダニスク）に向けて再発送するオランダ・ドイツ系商社の活動と連携することによってのみ、ボルドーは植民地貿易を拡大することができたからです。地中海貿易についても事情は同じであり、18世紀のマルセイユは植民地貿易の分野でも枢要な地位を占めましたが、それはレヴァントに再輸出市場を開拓することにより可能になりました。マルセイユはレヴァント貿易の独占港であり、その伝統的な輸出品はラングドック製毛織物でしたが、やがて西インド産の砂糖・コーヒー・インジゴ（藍）をも大量に再輸出するようになり、スペイン領アメリカ産コチニール（紅色染料）と合わせて、オスマン帝国とペルシアの市場に奥深く進出させます。ですからいずれの場合にも、いわゆる伝統部門と革新部門とは緊密な相互依存関係にあり、両部門は有機的に連結してのみ成長を実現できたことがわかります。伝統と近代、保守と革新を好んで対比する歴史家や社会科学者の固定観念は、バルト海や地中海の沿岸地方に後進性の烙印を押したがありますが、それは東洋と西洋とを対立図式で描こうとする試みと同じく、客観的認識よりも価値判断を先行させる危険性をともなっていると思います。

最後に、地中海貿易の果たした社会文化史的役割についても簡潔に述べたいと思います。なぜならば文明史上における国際商業の意義は、数量的な経済的次元にとどまるものではありません。そして社会・文化的領域における地中海貿易の質的優越こそは、北西ヨーロッパ的価値基準を相対化するために有効な素材をあたえると考えられるからです。

地中海を特徴づけるのは、それが古来より人間・技術・情報・文化・

宗教の双方向的な移動・交流・伝播の舞台になった事実です。この永続的交流の歴史と比べれば、大西洋航路やインド洋航路を媒介とする新大陸やアジアとの交流は後発的・限定的で、しばしば一方向的な現象でした。この文化交流の歴史を象徴的に表現するのが、地中海共通の商人言語であるリングア・フランカ *lingua franca* の成立です。これはイタリア語を主体にプロヴァンス語、カタルーニャ語、ギリシア語、アラビア語、トルコ語などの要素を加えた混成言語で、中世後期から19世紀中葉まで広く使用されました。たしかに同様の混成言語は、16世紀以降のカリブ海域で形成されるクレオール語、17世紀以降の南シナ海に成立するピジン・イングリッシュ *Pidgin English* など、国際商業の発展にともない世界各地で観察されますが、しかしリングア・フランカはそのなかで最古の歴史をもち、また広域的な流通範囲をもつ言語として特筆に値します。

しかし地中海を舞台とする地域間交流史を構成するもっとも躍動的な要素は、宗教的迫害や政治的抑圧に起因する商人ディアスポラ、または「離散の民」の国際事業網でありましょう。実をいえば、さきほど要約した近世レヴァント貿易の持続的成長は、この商人ディアスポラの継起的展開と結びついて可能になったと考えられます。まず15世紀末以降イベリア半島を追われたセファルディム系ユダヤ人は、テッサロニキを筆頭とするオスマン帝国各地に移住して商売をいとなんだばかりでなく、トスカナ大公国のリヴォルノに定着し、17世紀にはこの自由港をレヴァント貿易の中継基地、地中海商業の決済市場として繁栄させるのに貢献しました。また同時期のアルメニア人は、サファヴィー朝ペルシアの王シャー・アッパースの強制移住政策により建設されたイスファハン城外区「新ジュルファ」を拠点とし、インドとペルシアからオスマン帝国の主要諸都市をへて、リヴォルノとアムステルダムにいたるユーラシア規模の商業ネットワークを構築し、とりわけペルシア産生糸の独占的交易により黄金時代を築きました。そし

て18世紀後半から急速に活動範囲を広げるギリシア商人、とくにキオス島出身の貴族商人たちは、成長する綿花輸出貿易の波にのって地中海沿岸とヨーロッパ各地の諸都市に拠点を形成し、やがて19世紀には、ギリシア独立戦争の影響で離散を拡大するとともに、オデッサに強固な商業拠点をかまえてウクライナ産穀物貿易に支配的役割を演じるようになるのです。

このような持続的交流の歴史を考慮すれば、19世紀前半のフランスでサン＝シモン主義の思想家たち、とりわけミシェル・シュヴァリエが『地中海システム』という論考のなかで、地中海を東洋と西洋との「婚姻の床」、諸文明の和解と融合の場として提示したのは、根拠のある構想だったというべきでしょう。工業化時代のヨーロッパでも、地中海は決して忘れられた存在だったわけではありません。

社会・文化的交流をともなう地中海貿易の質的重要性を証明する一例として、更紗製造技術の伝播について付言しておきましょう。これはわたくし自身の研究成果にもとづいて要約することになりますが、産業革命期の綿工業と密接な関係にあるインド更紗の染色技法は、長らくヨーロッパ製造業者にとって謎であり、その技術の導入と習得が喫緊の課題でありました。ところでこの技法をインドから直接輸入する試みは成功せず、その技術伝達はレヴァント経由で渡来したアルメニア人技術者により実現されました。西北インドのグジャラート地方から、ペルシアとレヴァントにいたる諸地方で更紗の製造と交易を組織していたアルメニア人の国際共同体が、マルセイユとアムステルダムに最初の技術を導入し、それにより高度な染色技法をヨーロッパ製造業界に浸透させる端緒をつくったのです。写真で示したインド、レヴァント、フランスの古更紗(図1)は、茜染めの染色技法と特徴的な小花模様との伝播・継承の関係をよく証言しています。地中海が文化と技術を伝える質的交流の場だったことは、この事例から鮮明に読みとることができるでしょう。



図1：茜染更紗の伝播—インド、レヴァント、ヨーロッパ

a) 左上＝西北インド製、17世紀 b) 右上＝西北インド製、19世紀または20世紀初頭

c) 左中＝レヴァント製、18世紀 d) 右中＝レヴァント製、18世紀

e) 左下＝フランス製、18世紀 f) 右下＝マルセイユ製、18世紀

出典：a) Jacqueline Jacqu  et al., *F erie indienne. Des rivages de l'Inde au royaume de France*. Paris-Mulhouse : Somogy/Mus e de l'impression sur  toffes, 2008, p. 71.

b) 講演者所蔵 c) d) e) f) 講演者撮影

※裏表紙も参照

IV. ヨーロッパ社会文化史の複眼的視角

―南フランスの個性の射程

これまでお話しした地中海貿易の社会文化史的役割をふまえて、最後にふたたびフランス史の次元に回帰しながら、南フランスのもつ社会・文化的な個性について若干の問題提起をすることにより、本講演の締めくくりにしたいと思います。ただし時間が残り少なくなりましたので、用意した第一のテーマである都市と農村の社会構造については、ごく簡単にふれるにとどめます。

ローマの伝統を継承する南フランスでは、集団指導制による統領都市 *villes de consulat* が成立し、聖俗領主権からしだいに離脱して自治コミュニティを形成しますが、それは百年戦争中の王権（または伯権）の弱体化に乗じてその独立性を高めると同時に、土地所有権の拡大をつうじて周辺農村への支配権を強化し、イタリア都市コムーネに類似する「コンタード」 *contado* を形成したことが特徴です。もうひとつの特徴は、地中海沿岸地方では農村が周辺の田園部から分離され、囲壁に守られた大集落を形成し、集落には非農業人口が多く居住し、都市とほぼ同等の自治制度をそなえた「都市的村落」 *village urbanisé* の形態をとることです。つまりプロヴァンスやラングドックでは、北フランスで見られるような都市と農村の対立は稀薄であり、両者は文化的相互浸透により一体性をたもち、社会生活の全体が地中海都市文化の伝統のなかで組織化されているのです。こうした事実も、北フランス王権による中央集権国家の強化・拡大を中心におく歴史記述法のなかでは、やはり「後進的」な社会制度の一例として軽視されることが多いのですが、最初の問題提起でも述べたように、現時点ではそのような価値基準から距離をおいて、南フランス社会の内在的論理とその文化的可能性とを考察する必要があると思います。

ひとつだけ考察の素材を提示しましょう。近世フランスで宗教改革運動の強固な基盤になり、ルイ14世による迫害に最後まで抵抗したのは、まさしくロワール川以南、またはサン＝マロとジュネーヴを結ぶ直線の南側に位置する諸地方です。プロテスタンティズムを台頭しつつある市民階級の宗教思想、資本主義の勃興をになう商人や手工業者を主体とする都市市民層の社会変革思想であるとする正統的見解からすれば、フランス宗教改革が中南部「後進地帯」の農村にまで浸透したのは、説明困難な逆説になるでしょう。しかしいま述べた都市と農村の文化的相互浸透、そして農村の都市的集落の特徴を考慮するならば、南フランスがカルヴァン派信仰を受けいれる土壌になったことは、さほど不思議な事態ではありません。プロヴァンス地方のリュベロン山麓が15-16世紀にヴァルド派の拠点になり、ラングドック地方のセヴェンヌ丘陵からアルデシュ山地にいたる帯状地域がスペイン継承戦争期に「カミザール」Camisards 反乱の根拠地になったのは、たんなる偶然の所産ではなく、宗教思想と社会構造との個性的な親和性を例示しているのです。

第二のテーマとして、啓蒙期フリーメイソン運動の展開を論じたいと思いますが、これも時間の制約から、要点のみお話しします。現在の日本ではとかく偏見をもって見られがちなこの秘密友愛団は、18世紀ヨーロッパではごく普通の社交組織であり、当時の知的エリートや上流社会層、のちには中下層市民の多くが加入していました。この団体は1717年にロンドンで「ロンドン大会所」Grand Lodge of London が創立されたのち、その統轄下に個別の集会組織として「会所」lodge が結成され、1720年代以降ヨーロッパ大陸の各地に組織を拡大したといわれます。それは理神論、世俗道徳、学芸振興、社会改良、平等主義、民主主義などの思想原理にもとづき、イギリス起源の新文化と啓蒙思想とを大陸に普及させる媒体になったと考えられ、ドイツの社会哲学者ユルゲン・ハーバマスは、これを「市民的公共圏」を体現する社交

組織のひとつに数えました。そうだとすると、フリーメイソン団はロンドン大会所を中心とする放射状国際組織であり、名誉革命後のイギリスの文化的覇権を表現する典型的事例というべきでしょうか。近代主義的なイギリス中心史観の立場からは、ぜひともそう考えたいとなるでしょう。しかしその後のフリーメイソン史を、近年の研究にもとづいて検討すれば、事態はさほど単純でないことがわかります。

なぜならば大陸諸国に伝播した秘密友愛団は、その性格をやがて変質させ、ロンドン大会所による統制から離脱して、独自の発展を開始するからです。はやくも世紀前半のうちに、フリーメイソンの制度・儀礼・思想・組織は、各地域の社会的・文化的・宗教的な諸条件に応じて多様化します。つまりロンドン統轄団体は制度の外枠をあたえただけで、その内実はかなり自由に改変される余地を残していたのです。そもそもロンドン大会所自体が、1751年以降は「新式派」Modernsと「古式派」Antientsに分裂し、1813年までこの分裂を解消できないありさまでしたから、その国際的権限を発揮できる状態にはありませんでした。またフランスでは1725年に「フランス大会所」Grande Loge de Franceなる統轄団体が結成されたことになっていますが、その裁治権はほぼパリ市内に限定され、フランス王国の全域におよぶことはありませんでした。その間にボルドー、マルセイユ、メス、ストラスブール、リヨンなどの王国周縁部の諸都市では、独立のメイソン会所が結成され、みずから通信網を整備して国際規模の社交空間を構築するのです。最初の勃興期から18世紀末にいたるまで、フリーメイソン組織がもっとも発達したのは、総じて沿海地方と国境地帯、つまり王国周縁部の諸都市でありました(図2)。

こうしてフランスやドイツでは、フリーメイソン団の内包する秘教的側面を深化させ、宗教的色彩の濃厚な騎士团的・錬金術的・神智学的な「高位階制」Hauts-Gradesの儀礼を発展させます。近代イギリスの正統的フリーメイソン史の立場からは、これはメイソン精神の墮落

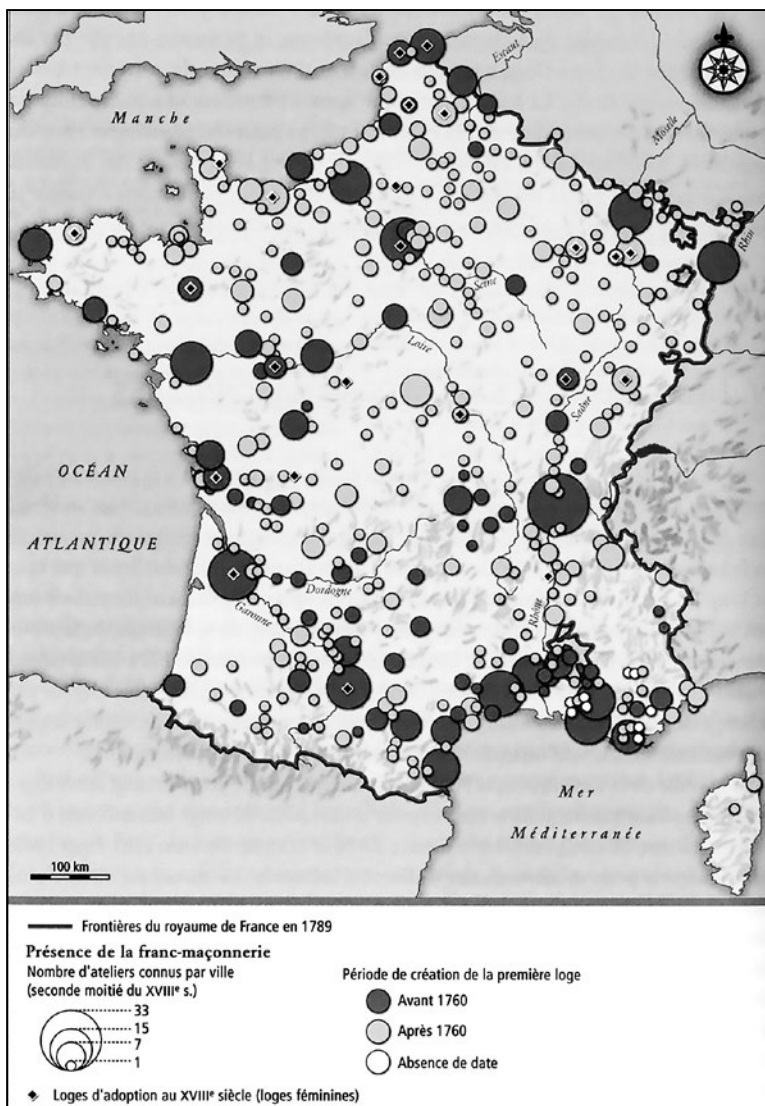


図2：18世紀末フランス・フリーメイソン会所の分布

出典：Pierre-Yves Beaurepaire, *La France des Lumières 1715-1789*. Paris: Belin, 2011, p. 362.

円の大きさは都市別のフリーメイソン会所数を表示 濃色円＝1760年以前に最初の会所創立／
淡色円＝1760年以降に最初の会所創立／白円＝創立時期不明

形態として断罪されてきましたが、しかし秘教的要素はイングランドやスコットランドの職能団体の伝統に当初から含まれており、啓蒙的で合理的なイギリス精神と、「オカルト」的で非合理的な大陸精神とを対比するのは、19世紀につくられた神話にすぎません。むしろ秘教的探究の意味と方向とが、イギリスと大陸とのあいだで分岐を生じたと考えるべきでしょう。

ではこのように柔軟な社交組織と多様な思想運動との分野で、南フランスはいかなる位置を占めるのか、マルセイユから二つの代表的事例を抽出してみたいと思います。その第一は「スコットランド聖ヨハネ会所」Loge de Saint-Jean d'Écosseの名をもつ会所で、ここにはマルセイユ商業会議所の評議員や、マルセイユ学芸アカデミー会員など、有力な都市エリートの多数が加入していたことで知られ、その意味で権威ある社交組織でしたが、それは1751年に創立されたときから、エディンバラ大会所の公認をえたと主張して「スコットランド母会所」Mère loge écossaiseを自称し、フランス大会所への服属を拒否して、独自に子会所を各地に設立しました。その子会所組織と通信網とは、マルセイユ国際商業路に沿って、レヴァント商港からイタリアと北西ヨーロッパ諸都市をへて西インド諸島にまでおよびます。したがってそれはロンドンやパリの下部団体ではなく、南フランスを中心に地中海の東西にまたがる独自の国際社交ネットワークを構築したのです。

第二の事例は、わたくし自身がすでに多年にわたり研究している「三重団結会所」Loge de la Triple Unionという名の組織です。この会所は1783年に設立され、当初はパリの新統轄団体「フランス大東方会」Grand Orient de Franceから公認されましたが、まもなくその裁治権を離脱してドイツ起源の統轄団体「テンプル騎士厳守会」Stricte Observance Templièreに合流し、リヨンに本部をおく管区に所属して、キリスト教的色彩の濃厚な騎士団的フリーメイソン運動の一拠点を形成します。ドイツのブラウンシュヴァイク公を最高指導者とするこの団体は、

フランスでは東部国境地帯から南部沿海地方にいたる王国周縁部の諸都市、すなわちストラスブール、リヨン、マルセイユ、モンプリエ、ボルドーを拠点に広まり、ロンドンとパリの「自由主義的」メイソン制に対抗して、秘教的宗教性と権威的階層制とをそなえた「矯正スコットランド儀礼」Rite écossais rectifiéを導入した点で、北西ヨーロッパ型の啓蒙主義とは一線を画する思想運動として注目に値します。

要するにフリーメイソン団は国家の行政的規制を受けない自発的社交団体であり、それゆえに国家や制度教会による弾圧の対象にもなりましたが、まさにその理由から王制国家の枠組みから自立し、パリ中心の政治的権威からも、またイギリス主導の文化的影響力からも自由な次元に立脚して、それ固有の論理構造を基盤とする社会文化運動を展開することができたのです。

V. 結論

さて以上で本論を終わり、結論に移りたいと思います。これまでの議論をまとめると、まず農業地帯構造論による空間的視点から、ついで商業覇権移動論をめぐる時間的視点から、最後に社会文化運動のネットワーク的視点から、それぞれにヨーロッパ近世史に関する固定観念を打破しようと努めてきました。ただしこの再検討を試みた目的は、たんに北西ヨーロッパと南ヨーロッパの格差を緩和し、先進と後進の価値序列を相対化することではありません。そうではなくて、北と南、北海沿岸と地中海沿岸とを対比させる固定的図式そのものを、少なくとも一度は廃棄し、経済・社会・文化の新しい地域構造を探索し描出するよう努力することが大切なのです。

では本講演の例示的な考察から、そのような新しい地域構造を発見することができるでしょうか。いくつかの可能性のうち、わたくしはここで文明史上の「ロタリンギア」Lotharingia とでも呼ぶべき带状地

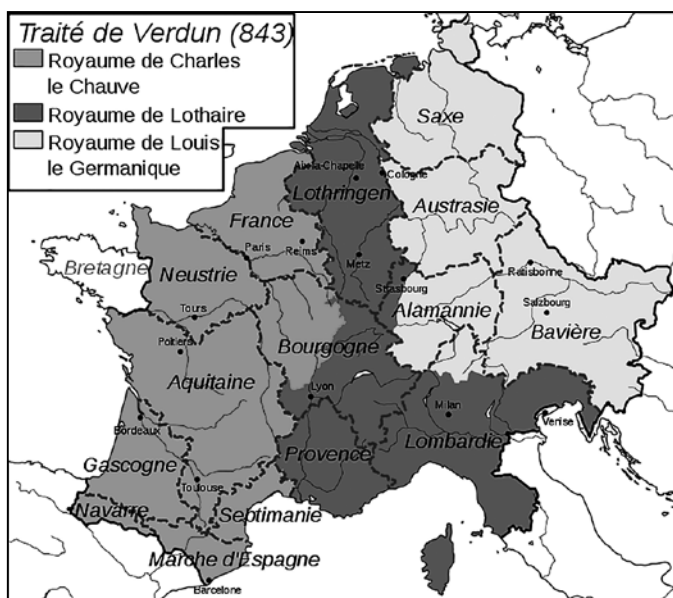


図3：ヴェルダン条約後のロタール中央王国

西＝シャルル禿頭王の西フランク王国／中央＝ロタール1世の中央王国／東＝ルートヴィヒ王の東フランク王国

域を提案したいと思います。ここでいう「ロタリンギア」とは、通常この名称で呼ばれるロタール2世の王国（855年成立）ではなく、むしろヴェルダン条約（843年）で成立したロタール1世の王国の領域にほぼ対応しています（図3）。この帯状地域の重要性については、すでに農業を論じた第2章の末尾で暗示しておきました。すなわちベルギーからラインラントにいたる諸地方を基盤とするシュヴェルツ農学と、スイス、南フランス、トスカーナの農業経営をモデルとするガスパラン農学との本質的類似性と連続性です。

じつは経済史の観点から見て、この帯状地域の実在性を推測させる要素は無数にあるといっても過言ではありません。それはフィレンツ

エとヴェネツィアからスダン、ケルン、アーヘン、レイデンにいたる中近世毛織物工業の中心地帯であり、マルセイユとジェノヴァからリヨン、ジュネーヴ、ヌシャテル、バーゼル、ミュルーズ、アルザス地方をへてブリュッセルとアムステルダムに達する18世紀更紗製造業の先進地帯でもあります。それゆえ第3章の末尾で述べたように、アルメニア人技術者が更紗の染色技法を最初に伝えたのがマルセイユとアムステルダムだったのは、たんなる偶然と考えるべきではないでしょう。しかもここはロレーヌ地方からリエージュにいたる鉄鉱脈、ザール地方やルール地方の石炭資源に恵まれ、19世紀産業革命はラインラント地方をその中軸として展開します。さらに加えて、この経済的「ロタリングア」は中世後期以降、ジュネーヴ、リヨン、プザンソン、ピアチェンツァ、フランクフルト・アム・マインなどを主体に、ヨーロッパ国際年市と為替決済市場の大動脈を形成します。中近世に先駆的な公立振替銀行を出現させたのもこの地帯であり、最初期のバルセロナをのぞけば、ジェノヴァ、ヴェネツィア、アムステルダム、ハンブルクがそこに位置しています。それゆえヴェルダン条約のさだめた東の間の政治領域のなかに、その後の永続的な経済構造が予告されていたのです。

文化史の次元でも、この帯状地域の重要性は明白です。16世紀人文主義と印刷・出版文化の中心は、ロッテルダムとバーゼルを結ぶ線上に位置したといわれ、代表的な人文主義者であるエラスムスがロッテルダムに生まれてバーゼルで死去したのは、この点から見て象徴的な事実です。そして宗教改革期のジュネーヴやリヨン、また17世紀以降のアムステルダムが、出版業の国際的中心だったことはよく知られています。さらに近世をつうじて、ここは宗教改革と対抗宗教改革との競合地帯になり、トレント公会議以後カトリック再征服運動の戦略目標となりました。したがってそれは激しい宗派対立と宗教迫害の舞台にもなり、カトリック側はネーデルラント南部、ロレーヌ公領、サヴ

オイア公領などをその牙城として、オランダ、プファルツ、アルザス、スイス、ジュネーヴの改革派勢力に対抗し、他方ではシエナ出身のソツィーニを始祖とする反三位一体派や、フッター派からメノナイトとアーミシュにいたる再洗礼派などの過激な改革思想の発祥地になりました。『チーズとうじ虫』の著者カルロ・ギンズブルグが、異端思想研究の対象領域とした北イタリアのフリウーリ地方もまた、このロタリンギアの一部に属することを想起しておきましょう。激烈な宗派對立は社会的・思想的な混沌状態をも生みだし、16世紀末から17世紀前半にかけて、この帯状地域を魔女迫害と魔女裁判の主要な舞台にしました。そして世界の混沌を超克しようとする秘教的探究は、フィレンツェからプロヴァンスとスイスをへてストラスブール、メス、アムステルダムにいたる各地に、古代ヘルメス学やユダヤ教カバラや錬金術や神智学の隆盛をもたらしました。16世紀の医師・錬金術師パラケルススと18世紀の神学者・観相学者ヨハン・カスパー・ラファーターとが、いずれもスイス人だったことは、おそらく偶然ではないと考えるべきでしょう。

思いつくままに列挙した以上の事例からも、経済的・文化的ロタリンギアのもつ持続的ダイナミズムを認めることができると思います。それは政治的な境界領域、つまりドイツとフランスに代表される領域国家の辺境でありながら、あるいはむしろ辺境であるがゆえに、交通の十字路、異文化接触の坩堝、宗派間対立の戦場、技術革新と経済活動の実験室の役割を演じつづけたと考えられます。イギリスは英仏海峡をへだててこの帯状地域の延長上に位置し、その文化的・経済的な果実を継承する環境にあったことにより、飛躍的発展の原動力を獲得したと考えることもできるでしょう。こういう歴史的視点から見れば、現在のEU（欧州連合）の主要機関がすべてこの地域に配置されている事実を、たんに地理的な利便性からのみ説明するのでは不十分だと思います。所在地を具体的に示せば、欧州議会はブリュッセルとストラス

ブル、欧州理事会と委員会はブリュッセル、欧州司法裁判所はルクセンブルク、そして欧州中央銀行本店はフランクフルト・アム・マインにあり、現代ヨーロッパの中軸がどこに位置するかを明示していると考えていいでしょう。

ですからわたくしは、ヨーロッパの歴史を先進的で革新的な北西ヨーロッパと、後進的で停滞的な南ヨーロッパという対立図式のなかで記述するよりも、西洋文明の大動脈をなす「ロタリングア」を媒介とする南北ヨーロッパの対話と交流と相互浸透の弁証法という視点から、その長期的変動と持続的構造とを考察するほうが、実り多い成果をもたらすのではないかと考えています。ご静聴ありがとうございました。

本講演とその印刷用原稿執筆は、公益社団法人日本港湾協会平成26年度研究奨励助成「マルセイユを中心とするフランス港湾都市の歴史地理学的・社会文化史的研究」による研究成果の一部である。

[追記]

佐藤彰一氏の追記を受けて、わたくしからもひと言だけ補足しておきましょう。佐藤氏がそこで述べられたように、わたくしのグローバル・ヒストリーに対する留保的姿勢は、やや説明不足でしたが、少しも同氏の講演に対する批判を含むものではありません。また同氏が歴史の「ナラティヴ」の多元性を強調された点にも、全面的に賛同できます。わたくしが心配するのは、近年のグローバル・ヒストリー流行が、まさしくこの歴史記述の多元性を圧迫する傾向をもたないかどうか、という点にあります。この流行の背景には、言うまでもなく現代世界のグローバル化現象があり、さらにその背後には、世界全域に画一的規準を要求するグローバル主義のイデオロギーが伏在することを、どうしても意識せざるをえないからです。

参考文献：

I. 序論

- Fernand Braudel, *L'identité de la France*. 3 vols. Paris: Arthaud-Flammarion, 1986.

II. ヨーロッパ農業史再考

- Marc Bloch, *Les caractères originaux de l'histoire rurale française*. 1931; nouvelle édition, 2 vols. Paris: Armand Colin, 1968. (マルク・ブロック『フランス農村史の基本性格』河野健二・飯沼二郎訳、創文社、1959年)
- 高橋幸八郎『市民革命の構造』(増補版、御茶の水書房、1966年)
- I. ウォーラーステイン『近代世界システムⅠ—農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』(川北稔訳、岩波書店、1981年／新版、名古屋大学出版会、2013年)
- I. ウォーラーステイン『近代世界システムⅡ—重商主義と「ヨーロッパ世界経済」の凝集 1600-1750』(川北稔訳、名古屋大学出版会、1993年／新版、2013年)
- Daniel Faucher, *La vie rurale vue par un géographe*. Toulouse: Institut de géographie de la faculté des lettres et sciences humaines, 1962.
- Pierre Vilar, *La Catalogne dans l'Espagne moderne*. 3 vols. Paris: SEVPEN, 1962; nouvelle édition, Paris: EHESS, 1982.
- André J. Bourde, *The Influence of England on the French Agronomes 1750-1789*. Cambridge: Cambridge University Press, 1953; new edition, 2013.
- André J. Bourde, *Agronomie et agronomes en France au XVIIIe siècle*. 3 vols. Paris: SEVPEN, 1967.
- 深沢克己「アドリアン・ド・ガスパランの農学思想—19世紀南フランス農業の発展方向との関連で」(『土地制度史学』84号、1979年、15-34頁)

- 飯沼二郎『農学成立史の研究』（農業総合研究所、1957年）
- 飯沼二郎『ドイツにおける農学成立史の研究』（御茶の水書房、1963年）

III. 近世ヨーロッパ国際商業史の眺望

- Fernand Braudel, *La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*. 1949; 5e édition, 2 vols. Paris: Armand Colin, 1982. (フェルナン・ブローデル『地中海』浜名優美訳、藤原書店、全5巻、1991-95年)
- Fernand Braudel, *Le modèle italien*. Paris: Éditions Arthaud, 1989.
- Ina Baghdiantz McCabe et als. (ed.), *Diaspora Entrepreneurial Networks. Four Centuries of History*. Oxford-New York: Berg, 2005.
- Michel Bruneau et als. (éd.), *Arméniens et Grecs en diaspora : approches comparatives*. Athènes: École française d'Athènes, 2007.
- Vassilis Kardasis, *Diaspora Merchants in the Black Sea. The Greeks in Southern Russia, 1775-1861*. New York-Oxford: Lexington Books, 2001.
- 深沢克己『商人と更紗—近世フランス＝レヴァント貿易史研究』（東京大学出版会、2007年）

IV. ヨーロッパ社会文化史の複眼的視角

- Philippe Wolff, « La ville française du Midi méditerranéen », in : Irad Malkin (dir.), *La France et la Méditerranée. Vingt-sept siècles d'interdépendance*. Leiden-New York-København-Köln: Brill, 1990, p. 183-227.
- Mireille Zarb, *Les privilèges de la ville de Marseille du Xe siècle à la Révolution*. Paris: Picard, 1961.
- Maurice Agulhon, *La vie sociale en Provence intérieure au lendemain de la Révolution*. Paris: Société des études robespierristes, 1970.

- Daniel Panzac, « La lingua franca: un outil de communication », in: Vera Constantini et Markus Koller (ed.), *Living in the Ottoman Ecumenical Community. Essays in honour of Suraiya Faruqi*. Leiden-Boston: Brill, 2008, p. 409-422.
- John Hamill, *The History of English Freemasonry*. London: Lewis Masonic, 1986; revised edition, 1994.
- Pierre-Yves Beaurepaire, *L'autre et le frère. L'étranger et la franc-maçonnerie en France au XVIIIe siècle*. Paris: Honoré Champion, 1998.
- Id., « Saint-Jean d'Écosse de Marseille, une puissance maçonnique méditerranéenne aux ambitions européennes », *Cahiers de la Méditerranée*, no. 72 (2006), p. 61-95.
- 深沢克己・桜井万里子編『友愛と秘密のヨーロッパ社会文化史—古代秘儀宗教からフリーメイソン団まで』（東京大学出版会、2010年）
- Katsumi Fukasawa, « Du Rite français au Rite écossais rectifié. Le choix de la Loge de la Triple Union de Marseille à la fin du XVIIIe siècle », in: Pierre-Yves Beaurepaire et als (dir.), *Diffusions et circulations des pratiques maçonniques, XVIIIe-XXe siècle*. Paris: Garnier, 2012, p. 63-81.

V. 結論

- カルロ・ギンズブルグ『チーズとうじ虫—16世紀の一粉挽屋の世界像』（杉山光信訳、みすず書房、1984年）